

的には中分化型腺癌で se, ly2, vo, n2 (No3, 111) であった。また詳細な病理学的検討の結果、食道病変は主病変とは非連続性の中分化型腺癌であり、胃癌の壁内転移と診断した。このような癌腫に対しては、手術の根治性と侵襲を考慮して、胃全摘に加え中下縦隔リンパ節郭清を伴う非開胸食道切除術が適当であると考えた。

13) 頸部進行食道癌に対する Grillo 手術の経験

松木 淳・広田 亨  
 桑原 史郎・武者 信行  
 大日向一夫・鈴木 聡  
 西巻 正・藍沢喜久雄  
 鈴木 力・畠山 勝義 (新潟大学第一外科)

頸部食道癌の外科的治療成績は、胸部食道癌に比べ不良である。しかしながら、根治的切除、リンパ節郭清を十分に行うことにより治癒せしめる症例も多く、また根治的手術の適応と為し得なくても、癌腫による気道狭窄や閉息、咽頭食道狭窄の改善のために切除再建適応とするべきものもある。

今回、我々は頸部食道癌気管浸潤例2例に対し、咽頭食道切除、両側頸部及び上縦隔リンパ節郭清、縦郭気管瘻作成 (Grillo)、咽頭胃吻合術を行い良好な結果を得たのでここに報告する。

14) 原発性十二指腸癌の検討  
 —乳頭部癌との比較—

野本 一博・土屋 嘉昭  
 筒井 光廣・梨本 篤  
 田中 乙雄・佐々木壽英 (県立がんセンター)  
 佐野 宗明・牧野 春彦 (新潟病院外科)

【目的と対象】 原発性十二指腸癌の特徴を明らかにするために、過去6年間の原発性十二指腸癌手術症例7例 (以下 DK 群) と、乳頭部癌手術症例14例 (以下 PVK 群) とを臨床病理学的に比較検討した。【結果】 ① DK 群の最大径は 2.5~6.5 cm (平均 4.3 cm) で PVK 群に比べ有意に大きい腫瘍が多かった (p=0.0035)。② 手術は全症例に PD が施行されており、深達度は ss が 1例、si が 6例、リンパ節転移は si の 6例中 5例に認められ、PVK 群に比べ有意にリンパ節転移症例が多かった (p=0.0181)。下行部の症例の 2例で 16b1 にリンパ節転移を認めた。③ 3年生存率は DK 群75%、PVK 群 82.5% で、両者の間に有意差はなかった。【まとめ】 DK 群は PVK 群に比較し、進行癌で発見されること

が多く、また16番リンパ節に転移している症例もあるため、手術は16番郭清を含む PD が必要であると考えられた。

15) 食道と他臓器の重複癌症例の検討

片柳 憲雄・中川 悟  
 山本 陸生・斉藤 英樹  
 桑山 哲治・藍沢 修  
 丸田 有吉 (新潟市民病院外科)

1996 年末までの23年間に経験した食道癌症例 305 例のうち、他臓器に重複癌のある57例 (18.7%) を対象として、手術術式、治療成績を中心に検討した。同時性重複癌が33例、異時性重複癌は食道癌先行が11例、他臓器癌先行が13例であった。重複臓器は胃が30例 (52.6%) と最も多く、続いて大腸・直腸 8例、咽頭・喉頭 7例、肺 4例、甲状腺 3例、尿路系 3例などであった。胃癌との重複例では、早期癌が胃管作製時の切除範囲に含まれる場合を除いて胃全摘、回結腸あるいは空腸による再建を原則とした。両癌に対して治癒が期待できる治療ができたのは同時性重複癌26例 (78.8%)、異時性重複癌の食道癌先行10例 (66.7%)、他臓器癌先行 7例 (77.8%) であり、5 生率はそれぞれ 31.3%、25.0%、47.6% であった。治療成績向上のためには重複癌の存在を念頭においた診断と、両癌の治癒を目指した積極的な治療が重要であると思われた。

16) 正常分娩直後に性器出血で発見された妊娠性絨毛癌の 1例

東條 義弥・芹川 武大  
 青野 一則・花岡 仁一 (新潟市民病院)  
 竹内 裕・徳永 昭輝 (産婦人科)

正常分娩後異常性器出血にて発見された妊娠性絨毛癌症例を経験したので報告する。

【症例】 26歳、初産、妊娠経過順調、平成7年6月27日正常分娩。7月29日より性器出血を認め、8月7日子宮内容除去術を施行したが、その後も性器出血が持続し、8月17日再度子宮内容除去術施行した。絨毛性細胞を認め、9月7日尿中 HCG 1,600 IU/I と高値、経膈超音波断層法で、子宮内に 14×7.7 mm の腫瘍性病変を認め、MRI では、子宮筋層内に高信号域を認めた。胸部 X線写真では転移巣は認められず、絨毛癌診断スコア 5点、臨床的絨毛癌と診断。9月15日より Etoposide 150 mg×5日間、10月5日より MEA 療法を2コース施行。